

質疑応答

Q. 第3四半期より、CSKカンパニーでは工事進行基準の適用範囲を拡大されたとのことですが、その通期での影響額の見通しを教えてください。

A. CSKカンパニーにおける工事進行基準の適用範囲の拡大についてですが、元々CSKでは一定の金額以上の大型案件に限って工事進行基準を適用しておりましたが、SCSでは全案件に工事進行基準を適用していたため、それに合わせる形で適用範囲を拡大したというものです。ご質問の第4四半期における工事進行基準適用の影響ですが、第3四半期における工事進行基準の売上は39億円弱となりましたが、このうち90%以上は第4四半期に完成します。この部分については従前であれば第4四半期に計上されていたものが第3四半期にて前倒し計上されたということとなります。一方、第4四半期よりスタートする工事進行基準での売上もありますが、これはCSKにて従来仕掛品として計上していたものが、工事進行基準の適用により売上として計上されるものがございます。ゆえに、第4四半期における影響についてはCSKにおける仕掛品の計上額の範囲内程度にて工事進行基準による売上金額はおさまり、第3四半期より小さな影響にとどまるとご理解いただければと思います。

Q. 受注について、具体的に業種ごとの状況と今後の見通しを教えてください。

A. まず、金融業において幾つかの企業グループの中で経営統合の話が進捗しており、来期に向けての経営統合にかかる大型案件の積み上がりが第4四半期以降に期待されます。

また、SCSカンパニーでは、流通業向けの2年以上にわたる大型案件が立ち上がりつつあり、第3四半期単独で10億円強を受注しておりますが、第4四半期ではそれ以上の受注が期待できます。また、ディールフローも堅調であり、幾つか提案中の案件もあることから、来期に向けて流通業は期待できる業種の1つであると考えております。

加えて、製造業についてですが、昨今各企業の収益動向は厳しいものの、我々の足元では特にネガティブな状況はなく、この9ヶ月の状況において製造業でのディールフローは比較的堅調であります。特に我々が得意としているグローバル案件の進捗も期待しており、現在も中型案件の引き合いを数件いただいている状況であります。

以上のことから、来期に向けて金融、流通、製造の分野での受注の積み上げが期待できると考えております。

Q. ERP (SAP、Oracle、ProActive) の実績を教えてください。

A. SCS カンパニー業績 (単位：億円)

	10 年度 3Q 累計	11 年度 3Q 累計	増減額
SAP	53	49	△4
Oracle	20	11	△9
ProActive	28	30	2
合計	101	90	△11

Oracle は、一部を第 4 四半期に取り返す予定ではありますが、昨年度における大型案件の影響により減少しております。一方、ProActive は、第 4 四半期に向けて案件の進捗が今後進むと期待しております。また、CSK カンパニーでも、SAP、Oracle の関連ビジネスがあり、特に Oracle のビジネスが大きい状況ですが、現在新会社としての全社的な集計方法を検討中であり、両カンパニーにて管理数値として同一の基準に基づく数値が出来た段階で、別途お話し申し上げたいと思います。なお、ご参考までにお話しすると、CSK カンパニーの第 3 四半期累計実績としては 30 億円～40 億円規模の関連ビジネスがあるをご理解いただければと思います。

Q. 統合後の戦略として打ち出されていたコスト改善の進捗についてですが、3 ヶ月前の発表時と比べて新しくアップデートしていただける内容があれば教えてください。

A. コスト削減については、経営計画にてお話ししました業務委託費の改善等を含む業務の効率化と、総人件費の適正化の 2 点につき説明させていただきます。

まず、1 つ目の業務の効率化については、ソフト開発事業における業務委託、外部発注の費用の効率化を含め鋭意推進しておりますが、現在、中期的・戦略的におつき合いさせていただく業務委託者を特定し強力な業務タイアップ関係を構築していこうとしております。本施策については、従前より SCS カンパニーが先行しておりますが、来期以降は CSK カンパニー、あるいは両社を統合した開発カンパニーにおいても具体化していこうと考える次第です。

2 つ目の総人件費の適正化については、社員の自然減等による適正化によるものですが、順次各年度の結果として出てくるものと考えています。近未来的には両社の人事制度の統合等を図ってまいりますので、これらの人事制度の統合とあわせて、総人件費の適正化が進捗するものと考えております。

以上 2 つのコスト削減施策については、今年度あるいは来年度で具体的に幾らというお話ではなく、来年度以降、取組みの進捗に応じて段階的に結果が見えてくるものをご理解いただければと思います。

- Q. プロフォーマ・ベースでの営業利益の比較(※)について、工事進行基準の影響を除くと全社として微増、CSKカンパニーにおいても若干の増加というお話でしたが、上期まで続いていたCSKカンパニーのコスト削減効果は第3四半期にてやや足踏みしたという見方で宜しいでしょうか。
- A. CSKにおいて前期になされた一部不採算事業の整理、あるいは各種人員削減による効果は前上期との比較で表れております。従前よりご説明しておりますが、各種コスト削減施策は前下期までに実施しており、従って下期に入っの前期比較ではコスト削減の程度は上期に比べて少なくなるものと元々想定しておりました。ただ、販管費の削減も含めた各種コスト削減施策の効果は引き続き出ており、不採算事業整理の一部についてもこの下期に効果として出ております。ゆえに収益力は相応に上がってきているというのが我々の理解であり、今後の第4四半期以降、来期に向けて弊社全体の収益力が高まっていく傾向は変わらないものと考えております。

(※)前年第3四半期会計期間(3ヶ月)におけるSCSとCSKを単純合算した業績と当期第3四半期(3ヶ月)のSCSKとしての業績の比較

以上